

イエス キリストは教育方法史に何を遺したか

竹 内 巧

On Jesus Christ's Legacy left to the World of Education Method

Takumi Takeuchi

As already known, Christianity and its church deeply influenced education in various respects. But it is a very difficult problem to ask what Jesus Christ did as a leading educator recorded in the history of education. The present writer picks up this problem and discusses it in this essay. He asks what Jesus Christ contributed to the field of education method.

Using sense perception for teaching was equipped to *Orbis Sensualium Pictus* by J. A. Comenius in 1657. But how did Comenius reach to such an effective method in his teaching Latin letters to his pupils. The present writer answers to this question. He thinks that the original spring of sensationalism is shown in Jesus' various revelations where his official life was, especially in the resurrection of his own body. He showed this truth to his disciples through their sense organs. Since his resurrection was made official, sense perception has been given an effective power for teaching.

From this point of view the writer thinks that Christ's legacy left to the world of education method is indicating the importance of sense organ in teaching.

序 章

世界の教育史あるいは教育方法史において、キリスト教あるいはキリスト教会がどのような影響を世俗の教育に与えたかについて、その事例を提示しようとするれば、それは枚挙のいとまもないほどである。

実際、学生の使用する教科書⁽¹⁾をみても、中世の教育がキリスト教会との出会い、結合あるいはその支配の下で成長してきた事実は否定出来ない事であり、9世紀以降の僧院学校(monastic school)、11世紀頃に始まった司教座聖堂学校(cathedral school)、祈唱堂学校(chantry school)、12、13世紀における大学教育の発達への道へと続き、世界における教育制度の基礎を築いている。

近代史に至ると、宗教改革の理念から、義務教育制度の確立と発展におけるプロテスタントの影響が顕著に見られ、庶民に対する識字教育の重要性が確実視され、これがヨーロッパ国民教育制度の基礎を形成する事になった。特にドイツ国民教育の形成、スカンジナビア諸国におけるルーテル派による庶民教育の開始は、近代ヨーロッパ教育制度が如何にキリスト教の影響の下にあったかを示す具体的な例であろう。

プロテスタントによる宗教改革と前後して、ローマカトリック教会も教育史上で顕著な教育活動を開始している。すなわち今日の英才教育に範を垂れているイエズス会と、ラサール(La Salle, 1651-1719)のキリスト教兄弟団(Freres Chretians)による庶民教育がある。これらは先のルーテル派教団と共に近代教育史を飾る事例を提供している。

さらに目を英国に転じると、産業革命後の都市化現象の中で、キリスト教の社会教育への影響が顕在化して来る。都市環境の悪化と、それによる児童の非行化に対応して生まれた教会の日曜学校 (Sunday school) による、これらの非行化を防ぐ道徳教育の開始、少年徒弟の社会的教育機関として YMCA (Young Men's Christian Association) の設置などが史実となる。またこの時代に発生して、その後の公教育機関に組み込まれた慈善学校 (charity school) も、また広い意味ではキリスト教の思想的影響の下にあったと考えられる。

ところで、近代教育史にみられるキリスト教の影響は、単に教育機関の設立とか、制度の形成だけではない。教育方法史においても顕著な事例を遺している。その例を挙げてみよう。その一つは教会問答 (catechism) である⁽²⁾。

教会問答は、周知のように宗教改革によって、福音派キリスト教 (主としてルーテル及びカルヴァン派) が、その信仰がローマ カトリック教会のみならず再洗礼派やツヴィングリ派キリスト教との教義上の相違のあることを明確に教示して、信徒及びその子弟の教育に用いた教材である。これら宗派の教会問答は、教育において教化 (indoctrination) の重要性を教育方法史上に提示したのである。

その他の例として示されるものとしては、助教法 (monitorial system) が挙げられる。一般に言うベル・ランカスター法 (Bell-Lancaster method) である。この教育方法は既にコメニウス (Joannes Amos Comenius, 1592-1670) によって提案されたもので、これが19世紀の英国の学校教育において使用された。因みに、ベル (Andrew Bell, 1753-1832) は英国国教徒 (conformist) であり、助教法を教会区学校 (parish school) で使い始めた。同様にランカスター (Joseph Lancaster, 1778-1838) は非国教徒 (nonconformist) であって、その宗派の子弟の教育にこれを使用したのである。経済的で能率的な教育方法による多人数教育を行った事例である。

この様に教育史を一瞥しただけでも、キリスト教あるいはその教会の活動が、多方面に渡って教育方法に強い影響力を与えていることが十分理解される。キリスト教にまつわる教育事象への影響は、これ以外にも多くみられるであろう。欧米の教育活動はキリスト教の歴史と共に展開をみたといっても過言ではない。

さて、このようなキリスト教徒と教育史との係わりの強さが示されているのにもかかわらず、イエス自身の教育への関与は、十分に報告されていない。事実、公生涯におけるイエスが教育問題について直接的に発言したと言う証しは無い。それは次のような理由によるものと考えられる。

まず、福音書におけるイエスの公生涯は決して長いものではなかった。彼の人生は殆ど三十年ほどのものであった。それに加えて彼の十字架上の死に至る生活は、伝統的なユダヤ教に対する批判とその改革のためのものであった。彼の生涯は宗教的闘争の日々であり、当然のことながら教団の形成、あるいは信徒の教育についての考えを述べる時間があつたとは予想されない。少なくともこれらの課題は彼の弟子たちのもの、あるいは彼らよりもあとの時代の問題であったと考えられる。勿論、この様なイエスの宗教的闘争生活の記録でも、彼の教育観を示唆する言葉が皆無という訳ではない。

その一つはかれの児童観である。福音書に示されたイエスの児童観の代表的なものとしては、天国に至ることの出来る典型的な人柄をもつ者としての児童、素直な子供の姿が示されている。ここで考えられるイエスの教育観は、子供のもっている素直な心が学習可能性、すなわち学習力

であるという観点である。天国に入るための準備としての教育は、子どもの素直な心にのみ応ずるものとイエスは考えたと思われるのである。(この点については後に再度論及したい。) 一般にキリスト教における教育原理のためによく引用される聖書の箇所は、旧約書『コヘレトの言葉(伝道の書)』にある句(12章, 1節)とこのイエスの児童尊重の言葉である。しかし、この二箇所という言葉が後世の世俗的教育史の上で影響力をもったとは考えにくい。

ところでイエスは、その公生涯で多くの説教を行った。福音書はこれらが多く喩えをもって行われたと報じている。むしろイエスの説教における常套手段は喩えであったと言えよう。彼は喩えを使用する事によって、分かり易い言葉でもって多くの人に説教したのである。福音書の言葉は、未だ真理を悟り得ない人々に喩えを用いる事によって人々の理解を求めたのである。教育の初期の段階での方法として、喩えは有効なものであった。

しかし、イエスの喩えの利用が、一般に教育方法の問題に影響をもったと考えるには、かなり無理がある。喩え話を利用して人々を説得へと導くのは、決してイエスに始まった事ではない。イエスの喩えの利用をもって、ソクラテスの対話法の教育にみられる影響と比較して論ずるのには無理がある。ソクラテスの対話法がかれの助産法、あるいは学習の助成理論へと展開する様には、イエスの喩えによる説得法が、後世の教育に採り込まれる事はなかった。

この様に考えてみると、イエスの生涯は後世の教育史に影響を与える程のものは無かったと考えることが妥当な事の様に見える。しかし本当にそうであったのであろうか。福音書の記述には、今まで考察した以外にイエスの生涯に起った事件の中に、後世の教育史に影響を与えたものが無かったのであろうか。

筆者はこの点に考察の焦点を絞って検討することにした。そして、この紙面上で一つの試論⁽³⁾を展開したいと思うのである。その結果、私はイエスが教育史とくに教育方法史に重要な貢献をしていると判断するのである。

1. 小学校第一学年国語科の教科書

筆者はイエスの教育方法上の貢献を小学校第一学年国語科の教科書の第一頁から、それをみる事が出来ると考えている。次にそれを例示する事によって論究を進める事にしよう。

ここに一冊の教科書がある。日本書籍株式会社発行の『わたしたちのしょうがくこくご1上』(平成元年版)である。表紙の裏とそれに続く一頁を開いてみよう。写真1(以下論文末尾にある写真参照のこと)に示されるように、紙面には目次と「たんけん」という章を示す仮名があるだけで、あとは山道を手もとから離れた風船玉を追っかけて、男女三人ずつの子供たち、そして犬一匹が道を登っていく絵が載せてある。国語の学習を始めている学級の児童達は、まず此処で「道」、「木立」、「子ども」、「犬」そして「風船玉」という具体的な物(絵)を与えられ、児童達は絵の中の山道や木立へと注意が引き寄せられる。彼らはかつて山歩きをしたときの自分の経験を呼び起こしながら、イメージを膨らませて楽しむ。

二頁と三頁では写真2に示される様に、前の頁に出てきた子どもと風船玉そして犬と共に、木立の間や枝の上に、また枝にぶら下がった動物達が見え隠れしている。児童達は教師の発問に従って、この絵の中で色々な動物を発見する(あるいは再確認する)様に指導される。すなわち感覚を通してまず物(出来事)を与えられるのである。しかしまだ言葉は与えられていない。

つぎに三頁、四頁に入ると教科書の絵は、入口と出口のある迷路をもつ平野部分の鳥瞰図とな

る。前頁の山道の頂上であろうか(写真3)。風船玉を追いかけて子ども達は、迷路に入り込んでいく。右手の山道から先ほど隠れていた動物達が子ども達を追いかけて、迷路の入口に向かう。教室の児童達は迷路を辿りながら、出口への道を発見することになるであろう。

さて、教科書のこの頁の下段には犬、猿、免そして狐の絵があり、写真にある様にそれぞれ犬、猿には二つ青丸が、免と狐には三つの青丸が付けてある。教師は児童に犬の絵を指して、「これは何だろう」と問う。「イヌ」と児童らの答えを求める。つぎに教師は猿を指して、「サル」と発音する事を求める。これら二つは二音である。続いて教師は免、狐を「ウサギ」「キツネ」と発音させる。ここでは国語教育の最初に、先ず児童に事物(絵)を与え、しかる後に言葉を与える。しかし未だ文字は与えられていない。

つぎの六、七頁に入ると、写真4に見られる様に、風船玉は子ども達をアスレチックの公園へと誘う。前から公園で遊んでいる子どもに加えて、十八人の子供達が絵の中で遊んでいる。教師は教室の児童達に、「ここは何処だろう。」と問いかける。児童達から「アスレチック!」という言葉がかえって来る事を期待できる。絵の中には子犬の他に三羽の異なった種類の鳥が載せてある。「これは何だろう。」という教師の問いかけに、児童の答えは色々出て来るであろう。「なんと言う鳥だろう。」と問えば、はと、からす、きつつきに至るまで、色々な種類の鳥の名前が出てくる。鳩と鳥はすぐに児童の言葉に出て来るであろう。しかし枯れ木にとまる啄木鳥は児童にとって馴染みの少ない鳥であろう。絵の鳥が啄木鳥である事を認めるのには、教師との発問応答のくり返しが必要となる。授業は児童の既に知っている物の確認から一歩出て、知らない物を新しく知る事へと進む。

この頁の下段には、これら三種類の鳥と一本の木の各々独立した絵があり、発音記号として鳩が「はと」と、鳥が「からす」、啄木鳥が「きつつき」と、前の頁の発音を促すに加えて、ひら仮名が導入されている。発音から、より抽象性をもった文字がここで導入されるのである。

八、九頁に入ると(写真5)、風船玉を追いかけていた六人の子どもと一匹の犬は、山の頂、海の見える丘に出た。山頂から向こうは青い海になっている。風船玉は海の上を空の中へと飛んでいく。青い海の水平線近くに白い汽船が運航している。子ども達はどんとどんと離れていく赤い風船玉に、手を上げて別れを告げながら、青い海の白い汽船を見つめている。青い空に、「みえる みえる あおい うみ。 みえる みえる しろい ふね。」と、書かれてある。ここで動詞と形容詞が導入されている。そして九頁の下部に、土筆の絵と、「つくし」と記して、その左に土筆のひら仮名の筆順が呈示されてある。

もくじの「たんけん」は、この頁(九)で終わるが(写真6)、十頁と十一頁を通して、五十音中最初の五音、「あ」「い」「う」「え」「お」について、蟻、犬、馬、駟、鬼の二音、家鴨、莓、免、絵本、落ち葉の三音、朝顔、猪、鶯、絵葉書、折り紙の四音を十五の絵で表示して、音声で単語をいわせ・最後に「あ」から「お」までの筆順を表記している。

この国語の教科書の教授原理は児童に発見する楽しみを与えているが、一般的には発見学習法を加味した感覚主義を基調としているとみてよいであろう。

2. コメニウスと旧約聖書

一般に流布されている教育方法史上、感覚を尊重するいわゆる感覚主義はコメニウスの主張をもってその始まりとしている。彼の『世界図絵(Orbis Sensualium Pictus), 1657』はそれが絵入

り教科書の最初の物として有名である。「先ず事物を、しかる後に言葉を」と言う、彼の言語教育のモットーが、教育方法一般に対して広い影響力をもつ事になったのは周知の通りである。ところでコメニウスは、『世界図絵』の扉に旧約聖書中モーセの五書の一つ、創世記の一節をあげている。すなわち、

主は、地上のすべての動物と、天の下のすべての鳥を、アダムがどのように名づけるかをみるために、それらを彼のもとへつかわされました。そしてアダムは、天の下のあらゆる動物と鳥および地上の獣に命名しました⁽⁴⁾。

という言葉である。この言葉は、コメニウスによってヘブライ・キリスト教の伝統的な考え方に、感覚主義に至る道のある事を呈示した事例として考えられる。神は人間に先ず事物（出来事）を与えた。人間はそれ（事物）を見て、それに名称（概念）を与えた。

ここで当然ではあるが、コメニウスが提出した観念は、天地創造以来、神が人間に最初に与えたものは言葉ではなく、事物あるいは出来事であると言うものである。人間は感覚を通して事物を認識し、それに概念を付加したのである。コメニウスは彼の教育方法に神学的正当性を求めたと考えられる。ここで我々は彼の感覚主義が、たんに思いつきではなく、実にヘブライの伝統的な考え方に根ざすものであった事を伺い知る事が出来る。

しかし旧約聖書にみられるヘブライの伝統では、どの程度人間の感覚能力を重要なものとして容認しているのであろうかという疑問がのこる。だが、この疑問に答えるのは難しい。

その理由の一つは、筆者が比較宗教学研究の成果に疎く、この問題を解く手法を知らないということである。その理由の第二は、各々の現存する宗教は多くの場合、その教義に神話を加えもっている。一般に神話は物語であり、寓話の形を採る場合がしばしばである。当然のことながら感覚的表現を多く採用している。したがって、ヘブライの宗教において感覚的なものを殊のほか採用していると判定することは、しごく困難な事であろう。

しかし、ここで注目すべき事がある。ヘブライの宗教が聖書の編纂に当たって、天地創造について語っている創世記をもって始めている事である。

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。（創世記、1章、1-4節）

筆者は、この部分で創世記の記者の言葉を文字通り受け取る事にする。神は世界創造の最初の仕事で光を創ったのである。すなわち感覚（ここでは視覚）の対象にとって最も大切である光を創造したのである。このことに筆者は一つの大きな意味を味合うのである。

確かに創世記のこの部分の記者は、ヘブライの神が天地を創造したと記している。地は混沌であったと記されており、また闇が深淵の面にあったと記されているところから、地は認識の対象とはなっていないと判断される。闇や混沌は認識の対象を形容する言葉ではない。神の霊が水の面を動いていたとあるから、神は満足することなく、神の認識の対象も地ではなかったと解釈できる。神が「光あれ」と言った理由はそこにあったと考える。

前述のように、光は感覚、とくに視覚の対象である。神はこの光をみて、良しとしたと記され

ている事は、神が感覚の対象を価値あるものとして、光の創造に満足した事を表現していると解釈することが出来よう。そしてこの記述からみて、ヘブライの宗教が殊のほか感覚の重要性を認識していた事を立証しうの一つの根拠であると言っても過言ではないと思われる。

勿論、旧約聖書で語られている神は、常に視覚の対象ではない。例外的には幻の様な形で感覚の対象となる事があっても、神は予言者への言葉を通して姿を示す。しかしイスラエルの民の求めは、必ずしも神の言葉だけに満足するものではなかった。彼らは神の技を目で見る事もまた求めたのである。詩篇79編、賛歌、アサフの詩には、民の要求を十分に知る事が出来る言葉がある。すなわち、その一節に、

どうして異国の民に言わせてよいでしょうか「彼らの神はどこにいる」と。あなたの僕らの注ぎ出された血に対する報復を異国の民の中で、わたしたちが目の前に見ることが出来ますように。(10節)

と嘆願している。民の求めは、この様に神の技を目で見る事であった。目で確かめる、神の技を目で確認できる事は旧約時代、ヘブライの民の宿願の一つであったと考えられる。つまり神の啓示が民の感覚を通して与えられる事を、民は願ったのである。

この様に考えてみると、創世記に語られている天地創造の物語は、神の技の大いなる啓示であると解釈する事が出来る。詩篇19編、賛歌、ダビデの詩は如実にこの事を物語っている。すなわち、

天は神の栄光を物語り 大空は御手の業を示す。昼は昼に語り伝え 夜は夜に知識を送る。話すこともなく、語ることもなく 声は聞えなくても その響きは全地にその言葉は世界の果てに向かう。(2 5節)

と謳う。神の栄光は言葉のみでなく、神は直接にその被造物の視覚に自己を呈示する。神は自己を示すため、彼の被造物に、殊に人間には感覚能力を与えたと解釈する途が示される。

前掲のコメニウスは、旧約聖書におけるこの解釈を次のように述べている。すなわち彼は、

すべて人間が事物の知識 (Scientia rerum) を獲得する力を生まれつきそなえていることは、明らかであります。なぜなら、第一に人間は神の似姿 (Imago Dei) であるからです。申すまでもなく似姿は、寸分違わぬものならば必ずその原型の特徴 (archetypi sui lineamenta) を写しています。さもなければ似姿とはいえますまい。ところで神の特性のうちにぬきこんでいるのは全知 (Omniscientia) ということです。したがって人間の中には必ず全知の・ある映像 (simulachrum) が映っていることになりましょう⁽⁵⁾。

と述べて、人間が本来知識を得る能力を備えていると主張する。神の特性である全知に対して、その似姿である人間は汎知 (あるいは博識、学識、eruditio) を目標として陶冶されると主張する。

さらにまたコメニウスは、人間の認識能力に欠く事のできないものとして、感覚の作用を説く事になる。すなわち彼は、

私たちの中に住む・理性をそなえた魂（Anima rationalis）には，器官（organ）が，いわば探偵（emissarii）斥候（speculatores）が付いています。理性をそなえた魂は，これらの助けをかりて，外界にある・一切のものを探索するのですが，これが視覚（Visus）聴覚（Auditus）臭覚（Olfactus）味覚（Gustus）触覚（Tactus）なのです。ですから，どこにある・どのような被造物もどれ一つとして理性をそなえた魂の前に姿をかくすことはできません。つまり，目に見える世界の中には，見られ聞かれ嗅がれ味われ触れられないものは一つもなく，またこれを通じて，それがなんであり（quid）どのようなものであるか（quales）を見わけられないものはなに一つないのですから，したがって感覚と理性（Sensus et Ratio）とをそなえた人間にとらえられないものは世界の中になに一つないということになるわけです。』⁶⁾

と感覚が，理性と共に人間の認識能力として，生まれつき備わっていると説くのである。感覚は人間にある生得的な「三者（学識，徳性，神に帰依する心）の根（radices）」の一つとして在る事を認めるのである。

しかし，筆者にとってコメニウスのこの考察では十分でない。筆者のここでの問題は，ヘブライの宗教がどれ程に感覚を重視しているかについてであったが，『大教授学』のこの部分，すなわち第五章の六及びそれに続く部分での感覚について述べている場所では，コメニウスは何一つ聖書に引用や参照を求めることなく，むしろ世俗的な（特にアリストテレスの）哲学に論拠を求めたり，あるいは彼自身の豊かな知識の披瀝をするのに留まっている。これからみると，旧約聖書におけるヘブライの宗教が感覚を極めて重視しているとか，感覚主義の立場に立つものであると言う証拠を見出したという事は出来ない。神が感覚の種子（semina）を植え付け，これが根を下ろしているとみるのは，コメニウスの卓見であるが，聖書に十分な根拠を認める事は出来ない。この故であろうか，世俗の哲学者フラスコ・ベイコンのコメニウスに対する影響を指摘する解釈が一般的である。

3. グノーシスの宗教と感覚主義

グノーシス派の宗教（グノーシス主義）は，紀元第1世紀，すなわちキリスト教の起源とほぼ同時代から第3あるいは第4世紀にかけて中東地域に発生した大きな宗教現象である。それらは時代のもつ精神的風土として終末論的な傾向をもつ宗教運動であり，当然のことながらヘブライの宗教やキリスト教と深く係わりながら，その展開を見せていた。すなわち現世を世界の終末の時代と見て，世界の破滅が近いことを予言する宗教的な活動が活発になったのである。そしてその最終的な救済を求める宗教運動である。この視点から見ると原始キリスト教もまた終末論の宗教であるから，これらグノーシス派の宗教との結びつきが歴史的に問題となるのは当然なことである。グノーシス派の宗教とキリスト教は，まさに世界の終末という恐怖の中に発生した。かの洗礼者ヨハネの予言は，終末の世にやって来る救世主についての予言であった。キリスト教の生まれた精神的気候風土はグノーシスのそれと共有するものとも言いうるものであった。

さて，周知のようにグノーシスは，もともとギリシャ語の知識（gnosis）に由来する言葉である。知識を得る事によって最終的な救済に与かるのである。したがって，知識は人の救済の知識であって，必ずしもプラトンの知識，すなわちイデアの世界のようなものを表しているのではない。グノーシス派が求めている知識とは，どの様にしたら人は救いに至るのかという知識であ

る。したがって、この知識にはその前提として、世界とそこにおける人間像がある。ここで筆者が採り上げて呈示したいのは、まさにこの世界像と人間像なのである。そこに隠されている旧約聖書の感覚主義的な傾向を問題としたいのである。

さてハンス ヨナス (Hans Jonas, 1903) によれば、色々な宗教的傾向を表現しているグノーシス諸派の基本的信条は以下のように要約されうる⁽⁷⁾。

すなわち、グノーシス派の思想は極端なまでにも二元論であった。神は世界の創造に関与することなく、世界(宇宙)やそこに住む人間とは超越的な関係に在る。つまり旧約聖書に見られるような天地創造は、グノーシス派の神の係わるものではない。世界は闇であって、神は光の国に存在する。神は世界を支配する関係には無い。神による創造ではない闇の国に対して神の支配は及ばない。したがって神の存在はあらゆる被造物から知られることなく隠されている。闇の国の支配は、闇の国の体制によるのである。ここでこの国、すなわち闇の国の体制を維持する支配者として登場して君臨するのがアルコーン (archon) である。

グノーシス派の宇宙は一般的な型として、七つの惑星の天球とこれを包み込む第八の恒星天からなる。惑星の支配者は先に述べた各々の星のアルコーンである。これらは各々の惑星で専制的な支配を行う。アルコーンは万物の創造者であると同時に、これら被造物を宇宙(前掲の惑星群)に閉じ込めておく、宇宙という監獄の看守の役目を担う者でもある。ここで入牢者は紛れもなく地をその土牢とする人間なのである。

ここで重要な事は、創造を悪魔の技とみなしている事である。ここから次のように言う事が出来る。すなわち旧約聖書創世記に見られる天地創造及び人間の創造は、悪魔の技であって、ヘブライの神であるエホバは、実のところ悪魔の一人、アルコーンである事になる。その故であろうかアルコーン達は、ときにヤオ、サバオト、アドナイ、エロヒム、エル・シャッドダイなど旧約聖書に記せられている神の名前が付けられていた⁽⁸⁾。

さてそれでは、この様なグノーシス派は人間をどのような姿に画いたのであろうか。ここに私の興味はある。

人間は肉体、魂、霊から成っていて、魂も身体と同様にこの惑星の世界の産物であると考えられた。この場合魂はプシューケー (psyche) であり、身体とともにアルコーンによって専制的に支配されていた。アルコーンは原人間の原型から人間のからだを創り、それに生命を与えた。勿論この生命は本当の意味での生命ではない。この生命が魂である。したがってこの魂は心的衝動であって、世界にある人間の欲望や情念を示している。人間の持つ色々な欲望や情念は、これら惑星を支配するアルコーンによって吹き込まれたものである。したがって人間の魂はアルコーンに支配されているのである。

ところで魂には霊 (プネウマ, pneuma) が取り込まれている。魂における霊の部分は、この世界にアルコーンによって閉じ込められた恒星にいる神の霊 (実質) の一部である。アルコーンによる人間の創造の目的は、霊を閉じ込めることにある。そして霊は人間の魂の中で眠り込んでいる。霊は神的なものでありながら、それを知らず魂と肉体という衣服を纏って寝ている。無知の状態である。グノーシス派の知識とはこの様な状態にある神の霊を覚醒させ、魂や肉体から解放させる為の救済の知識である。

グノーシス派の終末論は、したがって霊の魂や肉体からの、換言すれば、この世界からの解放の理論なのである。どのようにして霊を目覚めさせ、悪魔であるアルコーンを七つの惑星の世界で欺き、一步一步と霊を天界に昇らせ、恒星にある神に帰一させるための道程についての知識で

ある。この場合救済とは、霊の救済であって、霊の魂からの分離である。それは同時に霊の肉体からの分離でもある。

さてこの様に考えてくると、一つの面白い結論が生じてくる。すなわちグノーシス派の宗教からみると、旧約聖書の創世記にみられる神エホバの天地創造は、恒星にいる神の霊の落下してきた部分を魂そして肉体で包み込む作業となってくる。彼らの視点からすると、欲望や情念の原因となる感覚は邪悪なものであって、これからの解放こそがグノーシスの道となる。しかしこれを裏返して逆説的に考えれば、旧約聖書に語られているヘブライの宗教は、感覚をして人間を構成している要素としての価値あるものとみなしていると言っているのではなからうか。これはヘブライの宗教が天地創造を通して、肉体とともに感覚が、神によって与えられた真理認識の重要な機能をもつことを示した個所であると、みなすことが出来るのではあるまいか。旧約聖書に語られた人間の創造は、霊に感覚能力を与える事であるとみなすこともできる。この意味で感覚主義の一つの源泉をヘブライの宗教に求めることが可能であると、筆者は考える。

先にのべたコメニウスの三つ根のうち、博識の根として感覚を呈示したのは、ヘブライの宗教の持つ人間観の基本的な視座に立ったものであり、至極当然であったと言わなければならない。しかし宗教生活における感覚の尊重は、キリスト教の世界では、さらに発展していく。

4. 福音書と感覚主義

周知のように新約聖書の四つの福音書は主としてイエスの生涯を物語っている。しかしこれらの福音書は、各々何かしら異なった視座から、イエスの生涯を物語っていると考えられうる。たとえばマタイ伝福音書は、その冒頭で長々とアブラハムの子孫であって、ダビデの子孫としてのイエスキリストの系図から始めている。これはこの福音書が元々ユダヤ人に対して、イエスは彼らが求めているメシヤであることを認めさせるのを目的として書かれていると思われる。同様な事は他の福音書にもその独自の視座が見られる。その中でもマタイ、マルコ、ルカの共観福音書とは異なった視座にあるのがヨハネ伝福音書である。このヨハネ伝福音書はその有名な、哲学的な装いを持った極めて格調高い言葉をもって始めている。すなわち、

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。(ヨハネ伝、1章1節)

と言う記述で始めている。そしてそこには、古代ギリシャの哲学的雰囲気を感じさせてくれるものを発見する。しかしこの文章の後半に至ると、にわかにグノーシス的表現に突き当たる。「言の内に命があった」の場合、言を魂とするならば、命は肉体によって眠らされている霊である。「命は人間を照らす光であった」は、魂の中に眠っている霊は、しかし本来恒星に在る神の一部であって、人の救済にとってはその知識となるものであると解釈する事ができる。したがって「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」は、次のように言い換える事ができよう。すなわち、この世界は暗黒の世界である。この世界を支配している肉体、そしてそれに仕えている魂も光を見る事は無かった。しかしこの光こそがキリストであり、キリストこそ人の救

済の道であり、救済の知識である。ヨハネ伝の記者はこの事情を

律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。(ヨハネ伝、1章、17、18節)

と述べている。

ヨハネ伝福音書第一章のこれらの箇所だけを採って見ると、原始キリスト教と当時の終末論的な環境との係わりあい、極めて鮮明に窺い知る事が出来る。そこにはグノーシス派の宗教に極めて近い雰囲気を感じ取れる。

ところで、先に述べた様に四つの福音書は、いうなればイエスの公生涯と彼の復活昇天についての物語である。したがって、そこではイエスに纏わる多くの出来事が語られている。ヨハネ伝福音書も当然のことながら、共観福音書と同様に、イエスの宣教生活における色々な出来事を物語っている。イエスは単に言葉のみで弟子達や、人々に教えを述べ伝えたのではなかった。これら福音記者たちはこの事情を物語るのに当って、イエスが色々な秘蹟を行った事を記録に留めた。ここで筆者が特に注目している事は、秘蹟とは感覚を通して、人々に事柄(しるし)を伝える手段であると言う事である。それは言葉で表す事の出来ない真理を出来事で表す手段である。

イエスの最初の秘蹟は多分、ヨハネ伝にのみ語られているカナの婚姻の席での秘蹟であったと考えられている。酒の足らなくなった宴席でイエスは、母マリアの勧めもあって新郎新婦のために水がめ満杯の水を最良の葡萄酒に変化させた出来事であった(ヨハネ伝、2章、1-11節)。この出来事はイエスの公生涯に至る前のことであったと考えられている。

四つの福音書には多くの出来事がイエスの秘蹟として語られている。これらの秘蹟の中でも、イエスの最後でしかも最も重要なのが復活の秘蹟であろう。復活の秘蹟は、マタイ伝では復活したイエスが、マグダラのマリアともうひとりのマリアに現れている。イエスの死のあと、三日目の朝、彼の葬られた墓に行ったマリアたちは、そこで天使からイエスの復活の事実を告げられると、

婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。イエスは言われた。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」(マタイ伝、28章、8-10章)

と記されている。教育方法の学徒である筆者は、イエスの足を抱き喜ぶ婦人たちに興味をもつ。そこに感覚を通してイエスの復活の事実を確かめえた婦人たちの喜びをみる。

つぎにマルコ伝(16章、1-14節)では、やはり三日目の朝、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、そしてサロメがイエスの墓に行き、墓穴の中で白い衣をまとった青年からイエスの復活の事実を知らされている。彼女達は恐怖に怯え、誰にも事実について話すことはなかった。復活したイエスは、後にマグダラのマリアに現れたと福音記者は述べる。しかしマリアと復活したイエスとの出会いについて、誰も信じた者はいなかったとも記されている。またイエスは二人の弟

子に現れている。しかしこの場合、イエスは「別の姿で」現れている。この弟子の話も他の人々には信用されていないと福音記者は述べている。後にイエスは十一人の弟子に姿を現す事になる。イエスの復活という事実は、言葉でなく感覚によって与えられた。

筆者は「別の姿で」という言葉に興味をもつ。ここでイエスが別の姿で現れたということは、不完全表象を示している。つまり、この場合不完全表象を与えられた人々にとっては、類推その他の能力を使って間接的な認知を求められている事になる。別の姿を通して認識にいたるのは間接知である。しかしながらイエスは常に最後の段階で、自身の姿を現すことによって人々に直接知を与えている。ルカ伝にはこの間接知と直接知との関係が、より面白く語られている。

ルカ伝（24章）におけるイエスの復活の記事は概略さきに挙げた共観福音書と同じである。ここで三日目にイエスの墓を訪れたのは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そしてその他の婦人達であった。彼女達は墓穴で、「輝く衣を着た二人の人」に告げられたイエスの復活についての事実を、十一人の使徒（弟子）たちに話したが、彼らには「話がたわ言のように思われた」と記されている。

ところがルカ伝（24章、12節）及びヨハネ伝（20章、3-8節）では一つの事実が付け加えられている。それはペテロがたぶん不思議に思ったのであろう、墓に走り行きその事実を確かめようとしている事である。これは明らかに彼がイエスの復活を目で確かめようとした事を意味している。視覚をもって真理を求めようとした行為である。彼はその結果イエスが去った後の亜麻布をみて、出来事の異常さに驚き去っている。

またルカ伝（24章、13-35節）では、イエスがエマオという村に現れたと記録されているが、これは先のマルコ伝（16章、12-13節）と同じ資料に基づいている。しかしルカ伝（24章、34節）は十一人の弟子たちとシモンにもイエスが現れた事を簡単に述べている。これら物語の核心の一つは、姿を変えて現れたイエスが最後には自分の本当の姿を現すという筋立てである。つまり最後には復活の事実を視覚に訴える手段にイエスは出る事になる。

さて、四つの福音書の中で最も感覚が重視されているのはヨハネ伝である。イエスは視覚のみならず触覚をも用いて、自己の復活の事実を弟子たちに知らせようとしている。福音記者はその模様を次のように記している。多少長くなるが引用する。

その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。そう言って、手とわき腹とお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。（ヨハネ伝、20章、19-20節）

十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者でなく、信じる者になりなさい。」トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。（ヨハネ伝、20章、24-28節）

この引用の中で筆者は事実を教えるとき、感覚利用の重要性を発見する。すなわち、イエスは自己の復活の証しを弟子たちの感覚を通して彼らに伝えた。自分の指をイエスの体の受けた傷口に差し込んでみなければ、換言すれば、自己の感覚を通してのみしか真実を確信しないトマス、その彼に真理は感覚を通して与えられたのである。ヨハネ伝の記者は、人間の感覚能力が、神の啓示(revelation)を受け取るための重要な器官である事を示唆している。それと同時に真理もまた感覚を通して与えられると考えている。ヨハネ伝の冒頭で、グノーシス風の表現でもって福音を述べ始めたこの福音記者は、イエスの復活が肉体を伴った復活であった事、そしてこの真理(少なくとも彼自身にとっては真理である)が、感覚を通して確かめられえた事を記録したのである。イエスの肉体を伴った復活はこの様にして経験的に実証された事になる。キリスト教における経験、あるいは感覚的経験の重視はイエスの復活に始まると言えよう。そしてこれがキリスト教の伝統の一つとなるのである。

5. アッシシのフランシスと感覚主義

キリスト教の感覚的経験の重視という伝統、すなわち、啓示信仰の中で最も輝かしい信仰生活を送ったと考えられるのは、1182年イタリアのアッシシの富裕な商人の息子として生まれ、1226年10月3日の日没のころ、「わが声をもて我は主に呼びかける……」と神への讃歌を唄い、修道者としてその生涯を終ったフランシスである。彼についての聖者伝(Legenda)には、彼にまつわる秘蹟が語り綴られている。

『聖フランシスコの小さき花』は、彼の聖者伝の代表的なものの一つである。五十二の章にわたる中で、フランシスとその兄弟姉妹である修道士や修道女たちが出会い、あるいは行った秘蹟が語られている。その第十三章ではやはりイエスがフランシスとその弟子の中に現れている。作者不詳のこの作品では、修道会ができて間もない頃、フランシスと修道士たちは聖霊に導かれて、イエスについて語ったとき、

かれらがこのように語っているうちに、祝福されたおんかたキリストが、すばらしく美しい青年のような姿で、かれらの中央に現れになったからである。主は一同を祝福し、甘美な喜びで満たしてくださったので、かれらはみな脱魂状態におちいり、死んだように倒れふし、この世のことは何ひとつ感じなくなってしまった⁽⁹⁾。

と記録されている。又この書物ではフランシス自身によってなされた秘蹟が記録されている。最もよく知られているのは、第二十六章に記されているハンセン病患者を霊的にも肉体的にも癒したという記録である。

しかしこれらフランシスに纏わる秘蹟の中でも最も意義あることは、彼が彼の体にイエスと同じ十字架の傷を持っていたと言う事である。この傷についてはローマカトリック教徒が聖痕(Stigma)と呼んでいるものである。一般に中世の文学や伝記物、ことに聖者伝における事件や事実について、その信憑性を求めることは、多くの場合不可能なものである。しかしこの聖痕については、数少ない実証性をもった事実として知られている。下村寅太郎によると、フランシスの聖痕の根本資料は彼の最も信頼する修道士レオの記録とされている。アルヴェルナにフランシスと同行したレオは、その聖痕を目撃してそれを記録している。レオは、

.....かくして主の手は彼に下された。そして熾天使の出現と呼びかけと彼の身体にキリストの傷痕を印刻したことの故に、彼はこの手紙の裏面にある賛歌を草した。彼は彼に示された恩恵を主に感謝してこれを自分の手で書いた⁽¹⁰⁾。

と述べている。この書かれてあるレオの羊皮紙は現存し、その信憑性は様々な角度から保証されている。しかしフランシス自身はこの傷についてこれを隠し、信頼する兄弟たちにすら見せる事が無かったと伝えられている。フランシスの死後、多くの葬儀の参列者たちが、しかし聖痕を確認していると公証記録に残されてある。

またセラノのトマスは、

彼の手と足に、彼らは釘の穿入のみならず、彼の肉から出来、肉に根付き、明瞭に鉄の黒色をも認めしめる釘そのものを見定めた。しかし彼の左脇腹は槍で突き抜かれたように、実際に際立った赤い痕跡によって開かれ、彼の生前には其処から屢々血さえ流れ出た⁽¹¹⁾。

と『第二伝記 (Legenda secunda)』に記している。

さて問題はフランシスのこの聖痕をどのように理解するかである。先に掲げた下村寅太郎が述べているように、この聖痕が一種のヒステリー現象の結果であるとか、フランシス自身が自覚して、あるいは没我的に自分の身体に傷をつけたかは余り問題ではない。問題はこの事件がどのような意味を我々に与えているかである。

下村寅太郎はこの問題について次のような見解を示している。すなわち彼はフランシスがひたすら「キリストの模倣」に心がけ、キリストの貧困と受難の模倣を実践して、それを完成させる為に自らその身に傷を負うたと述べている⁽¹²⁾。この見解に対して筆者は十分に満足している。聖者の伝記に対する解釈者の立場として、聖痕の出来ごとを非神話化して理解するぎりぎりの立場である。

しかし筆者はこの「キリストの模倣」の完成という見解を踏まえて、あえて一步踏み込んで、次のように読み取ってみたいのである。すなわちフランシスは、イエスの十字架上の苦しみを事実として、感覚的に再現しようとしたと解釈するのである。十字架上のイエスの模倣だけではなく、苦しみそのものを感得しようとしたのである。苦しみの模倣の次に来るものは実体験でなければならない。使徒トマスは実体験をもってイエスの復活を感得しようとした。13世紀のフランシスは、自分の身体にキリストと同じ五つの傷を持つ事によって、十字架上のキリストの苦しみを実体験したのである。先の「模倣の完成」は実体験に他ならない。

さてこの様に考えてみると、イエスがキリスト教の伝統としたものは、感覚的経験を通して復活の事実を伝えようとした事である。

6. フランシスの後に

さて、フランシスの聖痕の事件は科学史の世界では、近代実験科学の遠因と考えられている節がある。もとよりこれは一種の推測の域を脱するものではないが、近代実験科学がイエスの秘蹟を栄光として、感覚的に再現を試みることにその端をみることが出来るとする考え方である。その一人が、フランシス会士のロージャー ベイコン (Roger Bacon, 1214-94) であろう。魔術博士

(doctor mirabilis) と称された彼は、スコラ哲学に抵抗した経験主義者であった。彼は単に神学論争に明け暮れただけでなく、その生涯に多くの実験を試みている。今日でいう科学実験である。

さて、それではこの様な中世の修道士にとって科学実験はどのような意味を持っていたであろうか。確かに下村寅太郎が前掲の著書で説くように、ベーコンの問題が「スコラの論理学は既知の真理の証明にすぎず、未知の真理の発見」⁽¹³⁾であったことは理解できる。ベーコンについての研究家は、彼がフランス会への入会以前すでに二十年間にわたって自由な科学研究を独力で行ってたと伝えている。この事から科学的探究に対するベーコンの課題を探ることは決して誤った事ではない。

しかしベーコンは単に科学者ではない。彼は世俗的であるよりか世俗を超えようとする修道僧である。彼のフランス会への入会が単に実利的動機、たとえば、彼の科学研究に対する協力あるいは保護を求めること、だけに有るのでは無いとするならば、彼の科学実験の課題もまた世俗的であるよりは超俗的であると見なすべきである。なぜならば、彼の入会には彼の内面的、それ故に精神的な欲求があったからであると報じられている⁽¹⁴⁾。さて、それでは超俗的な課題とはどのようなものであったであろうか。

この問題を解くにはかなりの準備が必要であろう。十分な資料と精査する能力を必要とする。しかし、現在の筆者にとってこの二つの面で準備がなされていない事を十分参酌した上で、次のように申し述べてみたい。

ロジャー ベーコンの科学実験は真理が感覚を通して与えられる事の確認を得るのみならず、神の徴(啓示)が感覚を通して与えられる事の確認を求めることであった。フランスに倣って彼は、神の啓示を自然現象の中に感覚を通して追い求めたと理解することができる。そして彼の経験的探求が、図らずも近代実験科学の源流を形成したと考えるのである。

勿論この考え方は、科学史の一つの見方として既に定着していると思われるが、啓示宗教としてのキリスト教の近代文化に対する影響として見る事が出来るのみでなく、イエスの死からの復活が、感覚を通して認知に至ったという事実を十分に、意識に留めおかなければならないと思うのである。筆者はキリストの復活なくして経験論哲学や経験科学の成立が無かったとは思わないが、これら経験的な考え方が中世のキリスト教修道者の生活から生まれたこと、なかんずく己の体に秘蹟を求めたフランスとその同労者たちの中から生まれてきた事を思うとき、経験論成立に於けるイエス復活の事実の重要さを感じるのである。

この様に感覚を通して経験を確実なものとする考え方は、思弁的神学に一定の歯止めをかけると同時に、思弁哲学にも波紋をもたらした。感覚とそれに基づく経験は、近代の哲学に確固たる地位を得たのである。周知のようにその後の経験論は、ルネサンス期にフランス ベーコン (Francis Bacon, 1561-1626) を生み、次第に英国に定着していく。それと同時に、経験論は僧族の手から世俗の手に移った。ジョン ロック (John Locke, 1632-1704) そして、デビッド ヒューム (David Hume, 1711-1776) はその代表的人物である。

さて、感覚を重んじる経験主義の立場は、次に英国を含めてヨーロッパに汎知主義をもたらす事になる。つまり博識(erudition)の強調である。これが後にフランスに於いて百科全書学派(encyclopaedists)を生むことになった。そして当然な事ではあるが、教育方法としては実質陶冶が重視される。前掲のコメニウスの場合もそうであった。彼にあっては、感覚能力は神の賜物であり、感覚を使って経験を広め博識に至るのは、神に対する人の務めである。子どもに対する実質陶冶は教師への至上命令となる。しかしこの様な考え方が、直ちにキリストの教えから出たもの

であるとは言えない。何故ならばイエスは博識な人を決して彼の弟子として求めようとはしなかった。彼の十二人の弟子たちは俗に言う頭の良い人たちではなかった。むしろ魯鈍に近い人たちもあったと思われる。したがって、コメニウスの汎知主義は福音書に基づいたものではない。

以上の論究の結論として言いうる事は、コメニウスの感覚主義が旧約聖書に掲げられた神とアダムの遣り取りにのみ根拠を求めうるものでなく、イエスの復活の出来事が感覚を通して弟子たちに呈示されたと言う事実にも求められうるという事である。すなわちコメニウスの感覚主義は福音書に呈示された、キリストの秘蹟にその端を持っていると言う事ができる。

今日、日本聖公会の祈祷書（1990年改定）では聖餐式文の冒頭に『参入』の項がある。これは「主が十字架の上に一たび成し遂げられ、今も続けておられる愛のみ業に参入する」こととされ、本文では司祭が、「主イエス・キリストよ、おいください」と、発唱すると、会衆は、「弟子たちの中に立ち、復活のみ姿を現されたように、わたしたちのうちにもお臨みください」と応唱する。これは明らかに感覚を通して、神を求めていくキリスト教徒の姿を現している。すなわち、キリストの再臨を求める姿である。その姿が聖餐式では聖別されたパンと葡萄酒という感覚の対象となる。式文のこの個所は西暦11世紀頃のイベリヤ半島で使われていた典礼文の復活であると言われている⁽¹⁵⁾。以上の考察から、イエスが復活の出来事を弟子たちの感覚を通して呈示した事実は、現在に至ってもキリスト教徒にとって最も重要な事件なのである。感覚への信頼はこの事件に基づいている。

終 章

この論文に於ける探求課題は、イエス キリストは教育史あるいは教育方法史に何を遺したかと言う事であった。キリスト教は教育史のなかで色々とその活動が記録されてある。しかしイエスはその公生涯の中で教育史に残るような活動をしたのであろうか。その問いに答える事であった。

さて、前節までの議論に従って上にあげた問題に立ち返ってみると、イエス キリストの教育方法に対する貢献も、またおのずと理解の闕に達するであろう。

先ず事物を、しかるのち言葉をというコメニウスの教育方法上の主張は、感覚に対する信頼がその基礎にある。神が人に感覚機能を与え、その感覚能力によって、人はイエスの復活の事実を信じる事ができた。しかし感覚は単に人間にとって最も基本的なものであるだけでなく、最も動物的なものである。従って、感覚はあらゆる高等動物の子供にあっては先ず訓練されるべきものである。人間の子供にとっても先ず、感覚は正しく訓練されるべきである。この観点から、コメニウスもキリスト教の教育原理の一つとしているイエスの二つの言葉、

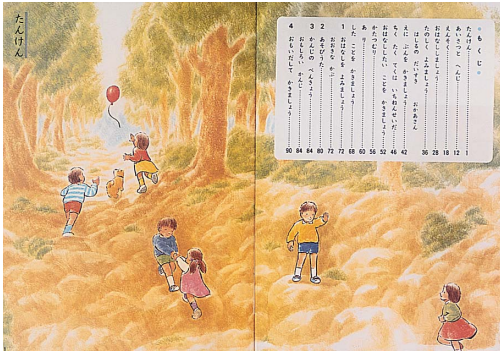
キリストはいつでも、幼な子のわれのもとにくるのを許せ。これをとどめてはならぬ。なぜなら、天の王国はこのような者のものであるから（マルコによる福音書 第十章、第十四句）。私たちおとなには、しかし、なんじらは、心をあらためて、幼な子になるのでなければ天の王国にはいることはできないであろう、と申しているのです（マタイによる福音書 第十八章 第三句）⁽¹⁶⁾。

は、福音書のこれらの個所に示されているように、素直な人になることが、天に入る条件

なのである。己を低くして、感覚を通して与えられる神の啓示をも素直に受け入れられる者こそが、天の王国に入りうる者なのである。この様に幼子の教育こそが、キリスト者の神に対する務めである。

以上の様に考えてみると、キリストの教育方法史における貢献については、次のように結論づけることができるであろう。言葉によらず、感覚を通して真理を啓示したイエスは、それを素直に受け取る幼子をして最も天国に相応しいものとした。感覚を通して真理を獲得することの大切さ、そしてその訓練こそ教育方法の基礎であることを示したのである。筆者はこの事実から、教育方法上の感覚主義もまた、復活のキリストがその事実を弟子たちに彼らの感覚を通して伝えた事に由来すると考える。とくに疑い深かったトマスには、感覚を持って試してみることを許した事に始まると結論づけるのである。

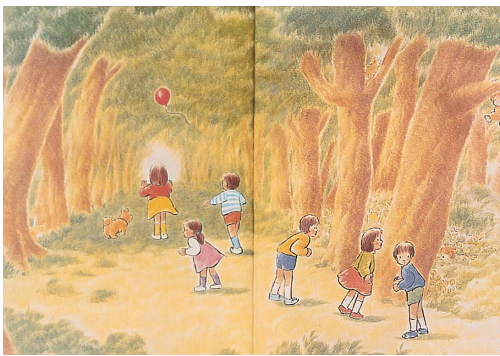
写 真



1



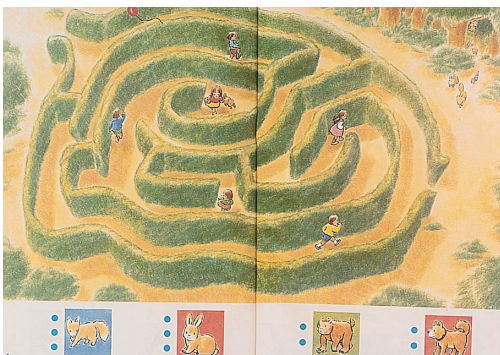
4



2



5



3



6

注

- (1) 教師養成研究会編、『近代教育史』,(学芸図書株式会社,昭和37年)参照。
- (2) カテキズムについては,小林清吉著,『宗教改革の教育史的意義』,(創文社,昭和35年) 87-206頁参考。
- (3) この論究を試論として発表するのは,この論文に含まれている多くの研究成果は筆者の師,下村寅太郎教授(東京教育大学)及び Professor Hans Jonas (New School for Social Research, New York) によるものであり,その他の論考に使用した材料は学界あるいは他の分野での常識程度のものである。また先行研究及び使用したテキストも原典に当たって十分な検討がなされていない。したがって未だ筆者の研究課題にあるものと読者に理解していただく為,試論の形式をとらせて頂くこととした。
- (4) J. A. コメニウス著,井ノ口淳三訳,『世界図絵』,(ミネルバ書房,1988年) i 頁引用。なおこの部分を新共同訳,『聖書,旧約聖書続編つき』,(日本聖書協会,1991年)を引用すると,「主なる神は,野のあらゆる獣,空のあらゆる鳥を土で形づくり,人のところへ持って来て,人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと,それはすべて,生き物の名となった。人はあらゆる家畜,空の鳥,野のあらゆる獣に名をつけたが,」(創世記,2章19及び20節)とある。
またこの論文で聖書の引用をする場合には,上記の新共同訳を使用する。
- (5) コメニウス著,鈴木秀勇訳,『大教授学』1,(梅根悟責任編集,世界教育学名著選,明治図書,1974年) 68頁引用。
- (6) コメニウス『上掲書』,70頁引用。
- (7) ハンス ヨナス著,秋山さと子・入江良平訳,『グノーシスの宗教 異邦の神の福音とキリスト教の端緒(*The Gnostic Religion: The Message of the Alien God and the Beginnings of Christianity*, 1958)』,(人文書院,1986年)を参照。この論文の章を書くに当たって,多くの訳語などを利用した。また引用など不完全な形で行ったので参照にとどめる。
- (8) ヨナス著,『前掲書』68頁参照。
- (9) 作者不詳,『聖フランシスコの小さき花』,(光明社,昭和17年)58頁引用。
- (10) 下村寅太郎著,『アッシシの聖フランシス』,(南窓社,昭和40年)45頁引用。
- (11) 『上掲書』,同頁引用。
- (12) 『上掲書』47頁参照。
- (13) 『上掲書』296頁引用。
- (14) 『上掲書』297頁参照。
- (15) この項についての情報は,聖公会神学院 元校長 今井丞治司祭による。
- (16) コメニウス『前掲書(大教授学)』,36頁引用。